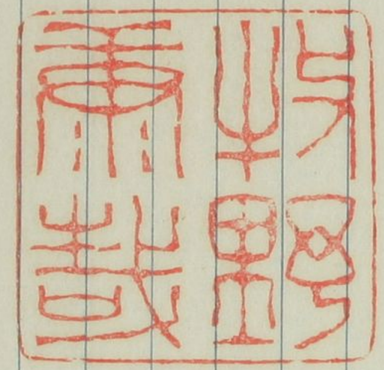
大正六年二月上浣起筆

渡邊董日記

六十

特別
14
1919
309

176584



復古堂日載第二十

林壽山石

鈕三獅爭玉刻

文云 牧童春耕

歌云 天保癸卯仲春

日谷林信敬篆刀

38- 9105

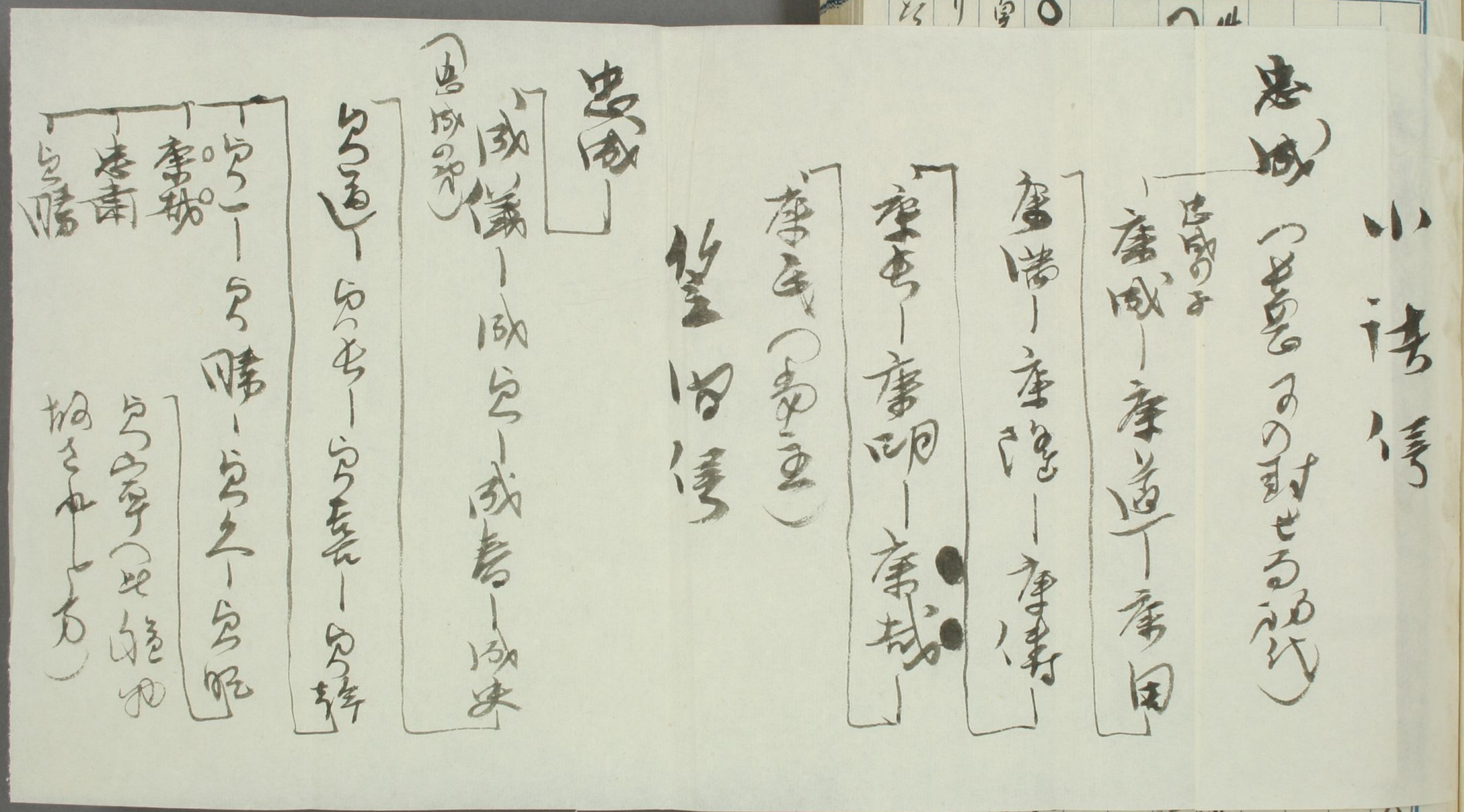
北印長岡喜藩主牧野図書頭の遺印を刻す
八牧野侯に仕へ、ときに十五信吾と京林吾つ人ともに
谷に住する日夜の雅事を所以也 此像奇木の印人傳
に載せ、ときに人猶之印面を磨し云へとも余未
卿翁に紹介せる人の遺印を以て塔印を猶
奥名人遺印の集中に至うんと欲す

大正六年二月十二日誌

○山本悟雲の石山形を帽を頂き三ツ巴
ツ金具の付者の彫刻界の人なるを以て食
指動き終に猶入る所遺憾也と雅趣あり
云く

黄仙好者我仙人未だ筆時先蔵

○二月十五日 大阪住 [illegible]
皇室を尊崇し奉る [illegible]
りなるつき其先祖と欲する内宮を祭る
なるべき あるべきを [illegible]


小清水信
忠成
忠成の子
忠成の孫
忠成
忠成
忠成

北印長岡寄藩主牧野[illegible]関元の遺印を刻し
八牧野侯に献じ[illegible]
谷に住する日谷の雅号所以也 [illegible]
[illegible]
卿[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○二月廿七日　平山氏ニ於テ古歌ヲ始ル事年
久しのことゝ也　北窓庵如雄頼氏ニ始ル
ことゝ窓庵ニ全家の始ル　二字別筆

二字別筆　窓庵　古雅摘藻

○月窓庵の題詞ニ云ク

春聽黄鶯

秋聞鳴鹿

北窓余所愛

丙　七月廿日

頼春

和義海口

頼氏ニ伴ひ来りしの故
海を経て行ける　無名者（仮名者）の人と云
平山藤次二ハ海ニ出ル　書を読む
杉苔の一紙

首端に霧を書し病中
如莊嚴頼子武
と書し 物行の跡家事云く
無助無恩古今賢士
勞煩好俗天下山形
辛丑三月六渡
蘇西生題
□□

如是杖頭霧酒
孫他半角薄也
蘇西又題
□□

鞍山の詩に云く
尤物非物得獲之真形顔
其形奇且雅頸強腰使
生横如老納臥容亦似仙
海手山手左膝強伸不離肩
扶疎撥雲白毫飛比顔淵
不須麟角下酒只要杖頭挑拳
杯藉同廉使人口流涎
代成小喜
獨臂翁鞍山
□□

○家康入德川家の京都に移る毎年尾張の援
助金を世話掛りなる堀新五郎入洛し
ては必ず此の年金を出すて歎息す、慶長
八年廣橋兼秀喉部に患ひ一月中旬京都大学病院
に起臥の入院切開の後一旦快
復せしも七度喉部に再発し終に死せり然れ
ども利子なりとて不幸薄弱なる年七十有一、余の恩
人なる牡年の氏名の援助を請ひしことあり
氏名の援助を請ひしことあり
氏名の援助を請ひしことあり

初のうち好きな既に近年帰宅の家に続けるのみ
陣屋寺に、所事の事 扶持上方と所隠居る可
けれども 平と渡すべきと歟

○京都と今一ツ高野高野の奥院に
兵術あり登山器険なりと（きいろ〳〵よきこと
一二記すべきことあり

巻末に記の八ツの命の一の地図を略図は出来て
どこの軍ぶり方に応じて大略の載せあ
るべきも兵法なるべし記さんべきひと
かとそれを指南とし登るべき巻末ひあ
る深山の法なるを一面を作んべ兵路の高
する場合もある橋をかけても架さんと思
ことあつもとれも雨あと流されたあの
らアテうるうるあるの自分で同じ山を二三
回も往復したことのあるが、なるべく分あて全
く初めて見る行くと同じく学つて歩るへと
概説（首）を再び面る説ひとるへ、別巻其山の
附図のあ本面高を作るのあ全の法を無い

又案内記なるものを別庵作られたるに日本アルプスなるの案内記を見る様なれども和漢十四の地もあるが地も出来ぬと云ふ所なれども
まくき渓谷の様なるものの書こと変なること、
想ひコンナものを探(探)ますと知らぬ人を誤
ることなるべし
あるう日本ナントカ云ふも狭き高山
うう路を出つ此なるしも川さく流れ
行けば一日なれども歩けば八里と(里)する受
合ひある
登山こわも大切なるもの
ある為次を防寒ひあるべ、万一の為め難部

を拾ひくれとこれを集めハニ
日や三日の飯食を拾くことう出来ず、防寒
の為め火を焚くの必要あるおこる大雨中
ひ火を焚くの材料の得難いこともあるこの
ナイかで出来るの材をケヅレバ真ち必ずす
乾いて居るそれを細くけづりそれを積み
合せ(の)形(の)杉(の)の葉を上に置き
火を近くすれば燃え
ますけづつた乾燥の下に置けば必ず火
も移るこの生木燃酒を是の様
芋を生のまま焼く金を焚料に困る場
合杖をのけのつるるものを無い

ウ井スキーのことき酒を業者として携帯することも肝要であることなれとも桑の沒毒に対する元気をつけるに用ゆる或る山蔭角力の解毒に懸命我々一行時に共の傷寒部のみの用あるこれも山中一効験の具なり

○京都伏見市大丸呉服店の迷者広告の一事後程々談話の中に一新奇を得る伏見に海寶寺と云寺院あり昔しこれ大丸の先祖堤寺弓山氏寺僧志田内を投ずしなるに本堂の背後一面の壁を剥ぎ鎖しなるもの有りそれを開くやを尋ねる一仏像を見出し仏像を拾しそこに大丸家四代目の人う一家の繁栄を祈るにそこの古帳簿を材料として作りなる仏像なることを知れり市中らそこの仏像を六尺の阿弥陀仏の脇侍に安置なしたるものとすべて重要の拝形色を施しなるものなるも立派のものとなる一貫張風にて彩色なるものとなる迷者広告を大原の麻売なる納めなることを知れり家毛波と拝を迎えに氣のつきたることなれ此の海寶寺の僧寶以前尾の住色し寺なる此の仏像を以前尾の新色なるものなるよう大丸の納めなるものとこと

○寛政清美金と云ふは寛政重撰後の後拾遺金なり、
余曰く、大隈侯後拾遺金を長崎にて行はるるも
清美金と高田前文書とも金と貨幣なることを
もとより断はり云ふものとのことなれば説すれば金と
あらざるも勢力ある結ばれる分を以て言ふ、実をいふ
ハ新しき葉なり、国一名高田と載せ曰く君を国姓大
臣と崇めんとの意味なるべし一朋按ずべきなり

君既に大臣の椅子を辭し得たり、之れ、今の君の運動を大
任とするに釣錢を拂ふことゝきゝたるまゝ、釣錢
を拂ふ座授を所有せざると一笑す
○今回の解散、一名の解散
今回の解散義人桑名の物なり、一名の解散
重要なる義界なれども俱し靈首なる
運動費を貴うをアテる無暗と題者場表と云ふ
うものゝ云ふ改正の事時報冷淡なるし
曰く マワシ小なれば土俵狹く出んとするハ主張曰
めるもの多しとう マワシを七寸出すと踏み出すを
フリテンと云ふ出すとうの兎も角もマワシを自作し
化粧マワシを靈と市ちゝ明治廣ゝ
○高東伍朝鮮本に趣味を為し十數年百集める

所二千冊に無ん、其中に極めて貴重なるもの殊に文
祿役の史料なるべきものあり、學校右衛の右と
多の重複するも大抵重複せず 吉田南三年前
より金に新を早稻田の圖書館の之を購入せんこ
とを要す、一面年を回書館の經費を以て無
うしかれども座する能はざるしかり 大無紀名經費
學生の四三第四回書長として五ヶ年、新
り支出のこと清しいなるも、吉田の請求を容れ、之を
購入することゝ、北の一抗の制鮮を設置と決す
る上は主子北の部類に關事を欠くことなし
○家を婚ふ為を第四五千四の資を要し而して毒入家
こと云ふの書簡を全部讀ること、さて教正

現に元拙つたなきを以て、容易ひとゝ〳〵、分類目録を
てゝそれを目録に作る丈で早や一ヶ月を費して未だ全
部目六う出来ぬ故なれども、今日六こゝ小修
を附し終るまでを前後二ヶ月を費やせり
ゝ、今分合類して数を調べたるに約三百十数
卷とする、但し行方の知れざる手離し書物
冊十数卷を除いたゝ、今分類したる大略の数を
左の記し置く

光悦書冊	六十六卷
名人書冊	七十卷（此印類とのべさる十数卷）
書画書冊	八卷
頼氏書冊	五卷

頼氏御友書冊	四卷
渕秀書冊	八卷
名府名家書冊	十二卷
華胥書冊	十六卷
維新諸士書冊	三十二卷
双魚堂墨跡	四十卷
双魚堂拓冊	三十七卷

一 日千里の画 七
一 魚厂往来 十七
一 冊盞書冊 六
一 俗人書冊 七

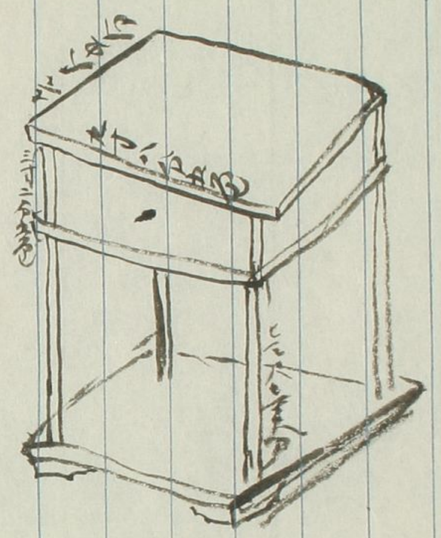
計 二百九十八

三月三日 誌

目下蔵漢中のもの数十数葉あり
尚外に白石鳩巣屏風二双あり
二十年間余の心血の凝く所奥し読もんが僅に三百
餘葉となる、然れども之れを日後人の為に伝ふる流
れと雖ども、但し記憶無き能はざるも、但し記憶余に代し
永く路頭に迷ふ事なきを得べし
而して余の目的を得し余の手元に為すべき者左の
如し
大丸屋鳥居清長二葉
北田一葉
源氏一葉

蓑洲一葉
柳富一葉
種彦一葉
外に重複の者田書幅帖に張込み　二帖
余の私事に関する往復書数葉
此等を余の子に残すべき資料の所にあるべき多
くの人に贈られんことを切望上外に出す
然いさる為四
三月四日記

○平山町に於て三月四の婦人と茶棚図左の如し



利益 七茶

三木町棚

杉

特徴

抽子 エルヤカこぬきさ

一尺弐寸(約四寸)

外釘 板の上にあらはれ

乃ち

抽子と抽子と板の

側面を正面にあらはし

抽子の柄 外材

を極めて小さく

○高瀬大学士大隈侯爵夫人の肖像を画かんとして小牡丹(花)の

の写生を依頼し上京中止と決す[illegible]

[illegible]に於て[illegible]の絵に[illegible]

る忘恩の非義なりと論じ[illegible]

之れを[illegible]し其高を清すと雖も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

困つゝしまむ也

○近こゝ得たる山陽北花手洋の墨こゝ藤西拝山の筆蹟あること前掲のごとし又こゝ二三の蹟跡を録し人を仮して高森碎山碎山嚴れたり、碎山一家を畫し左の五言を題す

る歳経風雪　名士存手洋
把玩城宮深　花朝ら月夕

碎巖の北行の数歩こゝ来す而して畫も亦一家也、余こゝ京都に游ぶの日北嶺を訪ふく高野嶺高森こゝ頼春山の記を見たゝ此すること也

○森梅南の半切四畳幅紙本を拡ること

燈人　詩こゝ

一彩雲裡数点雪　岸柳微黄香小紅
花枕拘浮春夢解　白鷗倫眼酒船中

梅南　大来口口

梅南古拙なる古の風すること甚と稱んこゝ一代の詩人遺墨亦珍とすべし余架中こゝ宝く所以也

○二月廿日こゝ書こゝ紀四史為石井高の以こゝ追悼を惜しこゝ余こゝ涙流すこゝ能はこゝ食卓上こゝ商家の説こゝ及ぶこゝ時こゝ高こゝ哀こゝ物こゝ感ずこゝ数めこゝ哀こゝ歌こゝ紀念こゝ記こゝ

二月八日、昔つて我社の理事であつた故石井勇君の爲めに追悼會が催された。當日の式場に當てられた生命保險協會にては一段高き祭壇に黒の幔幕を張り、中央に故人の遺影を掲げ、その前には盛花果物等を備へ、『白露遺稿』その外昔つて實業之日本に掲載せられたる故人の文章にして白露遺稿中に收められざるもの數千頁を合本したるもの等が飾られ、式は午後三時より極めて簡單に取行はれた。

當日、社長の開會の辭にも述べられてある如く、

石井君の本領

試驗を受けて入社した

自分が石井君と交を結んだのは非常に舊い、昔つて高田前文相が何か事故があつて、一時主筆といふやうな繁劇な事を避けられ、自分が暫らく其の位地に居たことがある、其の際石井君は試驗を受けて入社して來た。當時三人の人が、それぞれ履歴書をもつて來たのであるが、履歴書の方には餘り重きを置かずに兎に角應接室で何か書いて貰はうといふので、その三人に書いて貰つた。その時に初めて石井勇といふ人の署名のある原稿が出た。自分がそれを採決してその人を入れたのであるからよく記憶して居るが、その頃は德富蘇峰君の文章が或方面に非常に流行した時分で一種特色のある文章があちらこちらに讀まれた。その一人の原稿は恰も德富君の文章であるかの如き文章が出て來た、他の二通の原稿と較べて見ると雲泥の相違があるといふ譯で、直ちに石井君といふことになつた。

その敷衍力には驚いた

その後鄉里の新潟で、私のかねて關係した新聞が廢刊になり、箕浦雄君が、何か新聞から何かと云ふ相談を受けた。その時に石井君はあるまいかと云ふ相談をして讀賣新聞の大切な記者の筆力を感じた。それは題は忘れたが、何かその地方の問題に就て石井君の書かれたものを私は始めて讀んだのであるが、何でも三十回位も續いた大論文を書かれた。これは石井君が担任せられてから二三ヶ月位の事で、一の地方問題を提げて三十回も書くといふに至つては驚かざるを得ない。實際長くその地方に居た處で地方の一小問題に就て三十回も書くといふことはこれは非凡な敷衍力をもたぬと出來ぬことである。況や石井君は餘り地方的の頭腦を有つて居た人でもない、特殊の問題に就て餘り敷衍をして居ると蛇足を現はして困ることがある。然るに石井君の文を讀んで見ると實に肯綮に當つて居ることが衰々として出る、我々が書くと五日位で種切れになりさうな事柄を三十回も長々と旨く書いてある。然も何處を見ても旨いとが言つてある。成る程と點頭せしむるやうなことが毎日〳〵書いてあつて、其問題は實に一日でも云ひ得るといふ事柄である。そんな地方的な小問題を先づざつと三十回も續けて書かれるといふことに私は始めて驚いた。

その前に讀賣新聞に居られた時は書くことが國家の大問題とか何とか言ふことであつたから、それに就て書かれたのであるから左程困難でもなかつたらうが、地方に行つて些々たる事を捕へて之を旨く書くといふことは是程むつかしいことはない。石井君はこの點に於て第一にその才筆を示された。

これ又新聞記者には例がない

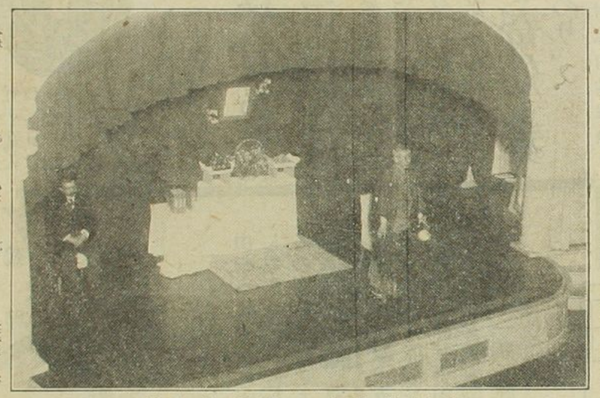
私の鄉里の新聞には種々なる主筆も入られて、現に私もその一人であるが餘り終りをよくしたものがない。ところが石井君の事情は頗る之と異り新潟に於て非常に珍重せられた。それにも拘らず今度は讀賣新聞の方では石井君が去つて後は頗る寂寞を感ずるといふやうなことで、高田田君の發議であつたが、斯樣なことで私が鄉里の新聞へ談判をすると、さう云ふことを云はれては

早稻田大學
名譽理事　市島謙吉

地底三千年

困ると言ふやうないろ〳〵、厄介な事も其の間に起つたが、結局また讀賣新聞社へ復帰されたのである。これが又云ふまでもなく、例の人間の人間に合ふ、是非その人でなくてはならぬといふことは餘り例がないことである。處が石井君の場合は前に言つたやうな譯で、とれは新聞記者の歴史に於ても稀有の例で、それだけ石井君の力を見ることが出來る譯である。

日本にも文章家は澤山ある、殊に新聞記者として時報に長して居る人も澤山あるがジヨナリストとして編輯局を主宰し編輯局員の經營を爲すといふことに就て能力は、單に文章に上手だからといふことに行はるものでは、ない、此の意味に於て成功した人は日本に於て幾人あらうか、先刻見へた德富君なども其の一人であらうと思ふが、私は少なくとも石井君といふ人は極めて少數な人の中のその一人だと考へてゐる。石井君は單に文章に長じて居られるばかりではない、文章よりは寧ろ他に長じた所が澤山あつたと思ふ。例へば卓の上の料理と云つたならば最も適するかも知れない。自分の受持つたものを旨く書くといふことはこれは能文の人は出來る、人の書いたものを旨くするといふことはこれは一寸むつかしい、人々の書いた文章を按排するといふことになると愈々それはむつかしい。この文章とあの文章とを取合せたらどうたらうと云ふやうな按排、折角のよい文章でも人の注意を惹かぬといふやうなものはそれが文章を殺すことになる、それを活かすやうにするのがまた最も大切な技術である。さう云ふことにも石井君はまた前に言つたやうに非常な敷衍力をもつて居る、殆んど一日か二日の間に實業之日本に於て極めて簡潔に書くと云ふ能力に富む人であらう。斯く石井君は編輯局に於ける最も有數な



追悼演說中の高田前文相

と思ふと又極めて短く書く力をもつて居る。兎に角一頁の間に天地を縮めて簡潔に書くといふ能力に於ても、一面增田社長の如き稀有の才ある人が居られた結果に相違ないけれども、又一面に於て石井君の如き極めてソリの合つた人で、然もそれは何事を爲しても筆にかゝることならば爲し得ぬことはないと云ふ人が居た結果であらうと思ふ。斯く石井君は編輯局に於ける經營者として自分は慥に日本にあつても有數な人である。

此點石井君の力が多い

元來實業之日本と云ふものは餘程やりにくい雜誌であらうと思ふ。實業と云ふことは今日こそ大變に立派なものゝ如くなつて來たが、今より二十年前に於ては如何であつたかといふに、これを下手にいじくり廻すと非常に俗なものになるのである。人のことを旨く持ちあげてやると言つても、下手な書きやうでは何かその人におべつかをいふやうになる、何かその人を愛憎するやうに陷り易い、どうも俗に陷り易い。然るに此の實業といふ俗な問題を提げて上品に高い處へ引あげて行つたといふことは恐らく實業之日本の今日成功された所以の大なる原因であらうと思ふが、その原因を爲した人の中には今日御列席の諸君の中で元老と言はれる方々は無論與つて大に力があられるに違いないが、その中に於て最も大なる力のあつた人は私は確に石井君であらうとかう考へるのである。石井君の人格と筆とが合して、實業といふ何だか下品に陷り易いやうな問題と云ふものに光を添へた、それが即ち實業之日本と云ふものを輝かした基である。まいかと思ふ。世の中には非常に立派な文章を書く人はある。けれども其の人の腹はどうかといふと丸でその文章と別の人が動くとするとあるが、石井君の場合はさうでない。先生の心持が愛して文章となる、文章が即ち先生の心持であるといふ譯で決して嘘いて居ない。斯樣に總ての點を具備したジヨナリストと云ふものは餘りない。石井君とは申しませぬが指で數へる位なものであらうと考へられるのである。

二月八日、昔つて我社の理事であつた故石井勇君の爲めに追悼會が催された。當日の式場に當てられた生命保險協會にては一段高き祭壇に黑の幔幕を張り、中央に故人の遺影を掲げ、その前には盛花果物等を備へ、『白露遺稿』この年つて實業之日本に掲載せられたる故人の文章にして白露遺稿中に收められざるもの數千頁を合本したるもの等が飾られ、式は午後三時より極めて肅粛に取行はれた。

當日は社長の開會の辭にも述べられてある如く、故人は晴れヶ間敷、何事も大袈裟なことを好まれなかつた精神を酌み、故人と特殊の關係を有したる高田前文相、新渡戸、浮田兩博士、市島謙吉君、德富蘇峰君、村井弦齋君、櫻邊瀧雄君、中井錦城君其外極めて少數の人々を招待したるを以て、會としては必ずしも盛大と云ふことは出來なかつたけれども、いづれも誠心誠意故人の人格を追慕し、最も精神的な緊張した會であつた。その追悼談の如きも、いづれも爽心より出でたものであつた。これ吾人の大に感謝する、最も充實したものであつた。

石井君の本領

試驗を受けて入社した

自分が石井君と交を結んだのは非常に舊い、昔つて高田前文相が何か事故があつて、一時主筆といふやうな繁劇な事を避けられ、自分が暫らく其の位地に居たことがある、其の際石井君は試驗を受けて入社して來た。當時三人の人が來た、それ〴〵履歴書をもつて來たのであるが、履歴書の方には餘り重きを置かずに兎に角應接室で何か書いて貰はうといふので、その三人に書いて貰つた。その時に初めて石井勇といふ人の署名のある原稿が出た。自分がそれを採決してその人をえれたのであるからよく記憶して居るが、その頃は德富蘇峰君の文章が或方面に非常に流行した時分で一種特色のある文章があちらこちらに讀まれた。その一人の原稿は恰も德富君の文章であるかの如き文章が出て來た、他の二通の原稿と較べて見ると雲泥の相違があるといふ譯で、直ちに石井君といふことになつた。

その敷衍力には驚いた

その後郷里の新潟で、私のかねて關係した新聞が曾つて一度は尾崎行雄君なり、箕浦勝人君なりが行つて居た新聞である。その新聞から何か東京で有力なる記者はあるまいかと云ふ相談を受けた。その時高田君と相談して讀賣新聞の大切な記者を剌愛して新潟にやつたのが即ち石井君である。私はその際越後に居た譯でありませぬから、越後に居た間の事情は餘り詳しく知らないが、どうしても私の記憶を去ることの出來ない一二の事がある。それは何かと云ふに私は寄に於て石井君の非凡の筆力を感じた。それは題は忘れたが、何かその地方の問題であつた、その問題に就て石井君の書かれたものを私は殆んど全篇を通じて讀んだのであるが、何でも三十回位も續いた大論文を書かれた。これは石井君が担任せられてから二三ヶ月位の事で、一の地方問題を提げて三十回も書くといふに至つては驚かざるを得ない。實際長くその地方に居た處で地方の一小問題に就て三十回も書くといふことはこれは非凡な敷衍力をもたぬと出來ぬことである。況や石井君は餘り地方的の頭腦を有つて居た人でもない、特殊の問題に就て餘り敷衍をして居ると蛇足を現はして困ることがある。然るに石井君の文を讀んで見ると實に肯綮に當つて居ることが滾々として出て、我々が書くと五日位で種切れになりさうな事柄を三十回も長々と旨く書いてある、然も何處を見ても旨いとが言つてある。成る程と點頭せしむるやうなことが毎日〳〵書いてあつて、其問題は實に一日でも云ひ得るといふ事柄である。そんな地方的な小問題を先づざつと三十回も續けて書かれるといふことに私は始めて驚いた。

その前に讀賣新聞に居られた時は書くことが國家の大問題とか何とか言ふことであつたから、それに就て書かれたのであるから左程困難でもなかつたらうが、地方に行つて些々たる事を捕へて之を旨く書くといふことは是程むつかしいことはない。石井君はこの點に於て第一にその才筆を示された。

これ又新聞記者には例がない

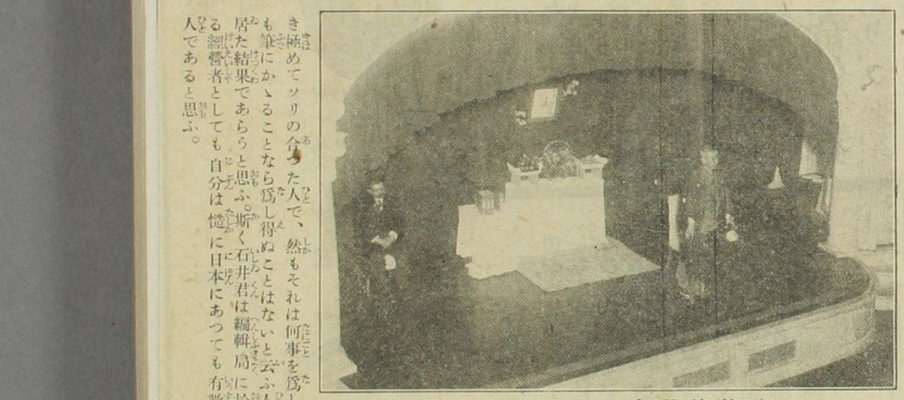
私の郷里の新聞には種々なる主筆も入られて、現に私もその一人であるが餘り終りをよくしたものがない。ところが石井君の事情は頗る之と異り新潟に於て非常に珍重せられた。それにも拘らず今度は讀賣新聞の方では石井君が去つて後は頗る寂寞を感ずるといふやうなことで、高田田君の發議であつたが、私が郷里へ談判をすると、さう云ふことを云はれては井君が担任せられてから二三ヶ月位の事で、一の地方問題を提げて三十回も書くといふに至つては驚かざるを得ない。實際長くその地方に居た處で地方の一小問題に就て三十回も書くといふことはこれは非凡な敷衍力をもたぬと出來ぬことである。況や石井君は餘り地方的の頭腦を有つて居た人でもない、特殊の問題に就て餘り敷衍をして居ると蛇足を現はして困ることがある。然るに石井君の文を讀んで見ると實に肯綮に當つて居ることが滾々として出て、我々が書くと五日位で種切れになりさうな事柄を三十回も長々と旨く書いてある、然も何處を見ても旨いとが言つてある。成る程と點頭せしむるやうなことが毎日〳〵書いてあつて、其問題は實に一日でも云ひ得るといふ事柄である。そんな地方的な小問題を先づざつと三十回も續けて書かれるといふことに私は始めて驚いた。

その前に讀賣新聞に居られた時は書くことが國家の大問題とか何とか言ふことであつたから、それに就て書かれたのであるから左程困難でもなかつたらうが、地方に行つて些々たる事を捕へて之を旨く書くといふことは是程むつかしいことはない。石井君はこの點に於て第一にその才筆を示された。

早稻田大學名譽理事　市島謙吉

文章の外にも天才があつた

日本にも文章家は澤山ある、殊に新聞記者として時に長して居る人も澤山あるがジョナリストとして編輯を主宰し編輯局に經營を爲すといふことに就ては能力は、單に文章が上手だからといふばかりで行けるものでは、ない、此の意味に於て成功した人は日本に於て幾人あらうか、私は少なくとも石井君といふ人は極めて少數な人の中のその一人だと考へてゐる。石井君は單に文章に長じて居られるばかりではない、文章よりは寧ろ他に長じた所が澤山あつたと思ふ。例へば卓の上の料理と云つたならば最も適するかも知れない。自分の受持つたものを旨く書くといふことはこれは能文の人は出來る、人の書いたものを旨くするといふことはこれは一寸むつかしい、人々の書いた文章を按排するといふことになると愈々それはむつかしい。この文章とあの文章とを取合せたらどうだらうと云ふやうな按排、折角のよい文章でも人の注意を惹かぬといふやうなものは殺すことになる。それを活かすやうにすることにも石井君は前に言つたやうに非常なる敏術である。さう云ふことに於て、然もそれは何事を爲してならば爲し得ぬことはないと云ふ人が居た結果であらうと思ふ。斯く石井君は編輯局に於ける自分をもつて居る、殆んど一日か二日の間に實業之日本位な雜誌を全部拵ふ位な力を有つて居る。さきかぶると思ふと又極めて短く書く力をもつて居る。兎に角一頁の間に天地を新めて簡潔に書くといふ力を有つて居た。新聞を作り、雜誌を作るといふ能力に於ても、一面增田社長の如き稀有の才ある人が居られた結果に相違ないけれども、又二面に於て石井君の如き極めてソリの合つた人で、然もそれは何事を爲して居た結果であらうと思ふ。斯く石井君は編輯局に於ける人であると思ふ。



追悼演說中の高田前文相

此點石井君の力が多い

元來實業之日本と云ふものは餘程やりにくい雜誌であらうと思ふ。實業と云ふことは今日こそ大變に立派なものゝ如くなつて來たが、今より二十年前に於ては如何であつたかといふに、これを下手にいじくり廻すと非常に俗なものになるのである。人のことを旨く持ちあげてやると言つても、下手な書きやうでは何かその人におべつかをいふやうになる、何かその人を愛憎するやうに陷り易い、どうも俗に陷り易い。然るに此の實業といふ俗な問題を提げて上品に高い處へ引あげて行つたといふことは恐らく實業之日本の今日成功された所以の大なる原因であらうと思ふが、その原因を爲した人の中には今日御列席の諸君の中で元老と言はれる方々は無論與つて大に力があられるに違いないが、その中に於て最も大なる力のあつた人は私は確に石井君であらうとかう考へるのである。石井君の人格と筆とが合して、實業といふ何だか下品に陷り易いやうな問題と云ふものに光を添へた、それが即ち實業之日本と云ふものを輝かした基である。まいかと思ふ。世の中には非常に立派な文章を書く人はある。けれども其の人の腹はどうかといふと丸でその文章と別の人が動もするとあるが、石井君の場合はさうでない。先生の心持が變して文章となる。文章が即ち先生の心持であるといふ譯で決して嘘いて居ない。斯樣に總ての點を具備したジョナリストと云ふものは餘りない。石井君一人とは申しませぬが指で數へる位なものであらうと考へられるのである。

○昨年来余の図書館のことに就ては大学と研究室と図書館の三者に提出し協議することを勉めしに大典紀念研究室并図書館部長共に、差当りの図書費を総額に於て決定することと共に年々の割当図書購入を追々実行することと、カード改正実行のことも此の際其中の資金を用ゐる事、右に付た の要領を決定することゝ致す 省を折りとり、別る事 格別面倒も無き事の様子なれども従来の経験に徴し早く決定し置くべきに付 建築費の剰余金の追々加はる為め、従来の資金に組込まざる事とす、折角新館成りても内容充実せざる憾あるべきを懸念し、あらかじめ此の決定をなしたり此年の載に漏れざるようにこゝに

紀元二千六百年記念研究室図書館経費中豫しめ計上せん図書費
金三萬四千円左の通り支出ス

一金七千萬円
新館成るの時に支出
すべき為め保留スル事

一金貳萬圓

新館落成迄四ヶ年
ニ分割シテ左ノ通リ
支出スベシ

第六年分　七千円
第七年分　四千円
第八年分　五千円
第九年分　五千円
第十年分　五千円

右修理費金四千円ヲ七年間ニ承認ヲ得ベキ事
（松山出張所ニ於テ支出シタル分ニ新四千円ヲ七年間ニ毎年千円ノ、控除スル）
（但シ一時大無紀念費金ヨリ出金仮ニ充テ千円ハ引ク内国書ノ内不用ノ分ヲ以テ上記ノ如ク本校住宅費ヨリ後払ニスル）

新館開校迄ニ修繕費ニ充テ
修理費二千七百円ヲ設ケ
ヲ前款二篇四ノ内ヨリ支出スル

一

右設備費ハ三ヶ年継続スベシ

毎年ノ支出額ニ相當スル図書購入方
法ハ各科并ニ図書館ヲ併セテ均分
ニ特別委員ヲ購入図書ヲ選定スル
事

設備費ヲ要スル年分ニ於テハ設
備費年分割額ヲ控除シ其ノ
残額ヲ切合スル

備考

本六年分

壱千四　費途左ノ如シ

金五百円　目録製造費
　　但十五円ノ内
金三百円　製本賃人
　　但弟六百円
金二百円　外四回市目録
　　類縁人賃

○富家の葬儀と別する為天皇と為分る
葬儀国は○こと中喪を使上げ活る七日を節も
訪問を為す初めは小閑を得ず三日間富家と共
に為忙を極むるなり記録に言ふ所仁兵衛なる
酒量多く且つ山を愛し味を楽し詩歌と為す
迄る偶と富を同じ一山に新たに墓を卜す二三を
相手、金閣山に撃つ一つ山を登山前行人
より初まるや四日程雪を冒して相手雪を四十
分以上の間分の高さに達する雪の為

八山の勾配四十度以内なることを上し得べし然
山も大概登攀することを得るなれども全く間
ふ甚だ困難の所有り山を登攀するを経るを
以合て然又曰く之れを越後
す余曰く高さ富士と齊しとなれども如何
なるの日を要するや曰く道を作りつつ登るの
有也且つ富士のごとく単調の立ちあるもの
又曰く登攀を企てさるを以山に生蕃住し危
険なるの所也と富士に比しもの高きを証
果して其人に高きや未だ絶頂に
つの測量を富士ならし聊か低くして其二回の測量
に同し高さなる結果を以て三回に過ぎざる

許高き結果を得ずと云へるを怪しし
測量者先富士と富士なるもの立けな
慶なる強くて高き結果を作りたることなき勢
無きなるなるを余に高山植物を問ふ高
山植物を山下に宜きすを迎いさしを法なる
や曰く或人と無しなるも高山植物を集めて人
あり活なるを見たるに宜きを活別なるものハ
光なるを以て高山を常なるを又曰く英国
に於ても源石に立流なる設備なる山岳なる設の
地下高く低きの漫なるを保つ設備なる時々人
迷なる霧を起す自分の地下室に入りなる
時なるなるを霧を起して見ようと言ふ

宗家に有するの日蓮四師伝前の四祖及板写の金
勝寺元版法華の大成と都を以て、甚だ珍
正已且朱文霊廟の叙写の退義院の義書印刷
甚だ精と友松父東里の勢級写の四千四年廿月
西京寺泉出雲寺に構ふと写十冊本の京一本潮
く、友松と就て支けは或は一本の他の寺冊と混
して写せ印刷ものを搜索を訪ふ、北行
訪る者を得ん事を待て而して北の野を
得て回数を壮すを得ざる北の写偶
に伝寿及右二門写回寺と就き一事を訪る
九原無為心寺と巳に一部を寄附やしも
数冊も、中に古堆を為す甚子写冊子写

而して徒に東大寺の印を捺するの写本の
甚だ寺家勇も一部を嘱しいりと又曰く北の黄
寺の回寺のこと)曰く甚だ寺院
甚だ及数年中に寺院の寺
寺きを捨てしを中に北寺と 龍 る
天才早就の写僧写而して北の文写を心一
写僧の秘蔵と云ふを見んが必ずや珍
籍或は回寺と値するもの乞ん、余心喜き一
見を欲す伝寿と再年の日沢人を紹し伝寿
快諾す 大正六年三月廿日於行る答会記
の旅中暫く写本の所を回寺の写本一平一のマツチの横
あり、中に海道の習慣を知るものあり

閑こ位ものす

○鰆の籠引　地引網の網の四隅に竹を四つ結びつけ、網を鰆の群れる時分に引上げます、網を曳く人は二組に分れ、網元が高人共と競ら合つて網元の命令を聞き、網元はもどかしがりて、自分で網元の命令を聞き、網元はもどかしがりて、自分で網元の命令を聞き、網元はもどかしがりて、自分で

家を直に清めて家紋を[illegible]

○[illegible]家紋の義、式[illegible]

北[illegible]の行事[illegible]

遵守[illegible]

の[illegible]

る図書[illegible]

[illegible]

[illegible]

の紋[illegible]

[illegible]

[illegible]

此事あり候ことなれば、慶応二年を示
すものもなく幕府政府の廣こと外国に於て謂めて不
りけんその他に政府のあるべき筈なれども其
の出品を義美）セし筑前下方平この場に薩州人
とうしかを以て高砂の地方義勇を奮揮し
その後薩藩者も自ら国藩と政府と併称セ
しその名を以つて出品の義に捨印したる也
佛西と別箱の上一冊数を惹記したれども、
もうまく言ひまげたるとて、幕末の情景
如何のごとくも察しうる、片山の書翰方と
記す

先般の来書、薩藩政府御印と対

当方御報ず
情状ならず出品の日本品を義美）セし薩
州の人岩下方平氏の出品と照付セし
義に捨印する為の義なれども
佛西政府を徳川幕府あるを薩藩爵
とハ何ものとて大に抗議セりとの然れども邦
今ごろ言ひ抜けるものあるべしとの
御者に云ふ

三月八日　片山貞太郎

○三月十四日　朝倉大隈義を論じ偶々政府紙の
久須美祐義高島廣井一加賀守三等も参会し候

八年等を相手にしたる三井物産会社の決算を公方面の活況を生ずるに至りたるは一朝一夕の事にあらず脱したるものにして左に新聞片的に録すること次の如し

○実業家たるものは常に世界の大勢を洞察し改革の機運に進行前途を事実上得るを改革のあるべき時期の到来を待ちて之を得さるべし

後人に見上られたる三井物産の発展の原因を考ふるに（自分の調査を元とし）唯々西洋の如くこれを思ふべきの成績を生せしも出地のみにあらず其の成績を挙げたるものにして其の成績を見上げられたるものなり

○国民を平等に見る進歩の大況を平民主義にあらずして

ことを幸ひとし、此の大況の結果を振興や活発を下しうるものあるべし（物価の上昇）

平民を外上げ之れを攻撃閥家や活発や元中を出す家柄と同等とし即ち後者を上げるとし自分を卑しくし成金を笑ふ

○日本も此戦争に得たる賠償金三億円を第一大阪の山々船の二千万円の増資を行ひ住友船の二千万円の上に一千万円の増資を行ひ新聞紙も株の満ちたる空前の出来高なり、之に微しても日本の富の増加を表し得日本は従来金利の高くして国債を

市の場所を先に定め利低為すを以て業の振起も下し得べし

○日本は久しく債務四億を負い二億の金を貸して一躍債権国となれり今の如き世界の列強に比し日本は富に於て優るの如ぐ独乙英に聯合国に本国を父祖の蓄積に比し富もまた遜色なしつゝあり而して回復の比免し戦後のくるも十年乃至十五年を要すべし

○訪る場合に於ては支那の報復の外交を試み利権を収むるを寺内内閣の前に表流に続れいる要因なり今日其の報来

すると雖とも折角の機会を逸し一つにあるを回の如き実に遺憾なり

○西洋の外交術はマキヤベリーの説く所権詐を則とす、所謂支那の外交術を見るも以上述べる彼等は事無き時にあるを八を解いしもるるの如世界は金を仕るるこうれば弱手は遇らざるべし、実に一部縄ひもうの如き易動なり

○支那の辞令は到千年練りに練り抜き西洋の強国と雖も此の辞令に撓み難し外交に於て常に失敗者なり夫の梁啓超のごとき実に自分の助けなるものあるべし其の

日本のあるやサンくお世話を蒙ぐるる文章を
寄せ来りたれどいさ本国に向へりたる一行は
謝辞を陳ぐ事ならず然れども一変す
薬師の操守無き田舎武士類なり
○現内閣に就ては曰く一時の喜劇とえるの外なし
薬師寺の行動を保守の還元なり永続
すべき道理なし内務省もまた高飛なるも
外務のやよ者を先ず大臣を信ずる旨
のことなりきまるあり次に薬師寺次官
の次官以下高長を立て事と大臣の思を絶
まる閣員事を絶するを勢の傍観と思ふ
す陸奥を疎陽命令あしうるもんとなり

○山縣も流れに平田等の説に賛成のさうしを
悔へ後義内相と新しきを悪成行をる
す後義の地位にもと知れ悪成行をる
訪れる時こびくく面会をしてキラう聲
を高くして後義を罵りて後義をこく
解しなりくの山縣を其人真意の
めの男の地位にて高義と新くまりとも
くと笑いる
○金侯に問ふて寺内と加藤の木との人格を以て
す侯曰く偏狭い一ろう生ろう能力
性比乃木を廉潔なる又益湯をなる寺
内に於ても廉潔を詩く権勢の地位にの

の小者等自家の親族を養ひ又他人を養ひ
七一人前なり

○寺内を偏狭なる人を養ひ家業なく人を
疑ふことなく一切かゝる輩のごとき
見苦しき風らさん小説傳奇なるものを
二三千冊の文学を自ら為す能はざる者
○侯戦ゝ山野や寺内を狙ひ市中の人物を
欺くなき風と為すべし
山野をのこと
やりの無能者を立てうすぶん
仲間や後家おまのことなり、どうせ無
の役廻りなり

○寺内小者養成不倫不堂にして美を立
流るゝのみなるも古来美風を自ら模倣
する者なるを施さるる偽善不倫
不堂なる其金手なるしことなる
彼等の行ふ所を恰も掏賊の天子を
装ふと一般也
○

○一昨年沼津に寄り居る家に帰り来りて
客刹を求め客を御殿と称し雲竜を廣田寺
に求めて圓寺を市ち東大寺住職の
世年津に其他四五印を示す中に菊池
五山自筆圓修寶鑑寺廣瀬脇坂
階寺恵信行寺、藤入る、圓修寶鑑寺二冊
の内上巻一冊五山自筆森川勝志舞鶴藩
藤井宗の弟子巻尾に山田梅村の十数の
詩を載せ巻尾に沼津に於るの日付
を書きたるこんの的の高
山五山の詩行を美濃国界宗五枚を一冊
に沼人張滋昭の評語あり

十二

毎日此人の蹟貴ある湾和助の山義に寄此書
東京に獲す却つて沼津に来て得るも亦奇
機なる哉の著作を全部縦横の加布中に伏
の弟子なる佛おの加布中に寄帳を義井佛おの
に翻刻せんと欲す

（大正六年三月十九）

附言圓修寶鑑寺の関係の第中にあるし
此方後圓寺後の陸列に伴ふ尾張に住也
しことなり圓寺鈴木の謝寺北寺冊海
（ある）

○昨夜貝を拾ひ北の松林に於て書を読みたる
り、即ち厨脇を押つて主ところ〳〵五六紙成る

文明協会事務所の名と額面と幅を書す額面の語を云く「清濁併呑」幅に云く

蓴子清易濁元惟諸吉修身之者、人何不以不知是一念加之吉

余嘗吉の事務所し戦争又の名刺の表と北語を印刷し巻集の詞に代へるものと、梅の為めに「唐紙是を印し」の堅幅を書し、梅女を○の嘱に応じ戯れに左の語を書して與ふ

為郎幅悼部羞郎

世主自為唐紙慶度を柳のごとし余の北語ある所以なり

○浪義に帰在る清国人多くまう所の偽と露西

革命功を奏し帝退位の詔勅を出づ因人余に説を求む余思へらく事実是に似ずと雖も亦之を以て事実に移さざる能はざる迄の政治の大義に於て別途の国何の国か大なる善果を得べきかと云て余を露国と為すと云て余を露国なりと云て民種混淆不統一の国なるを専制の国体を改めて民主制の端を開くことを露西の安寧を永遠に保つ所以なりとす又眼前の戦争に捷利を収むる所以なり帝の退位い憐ハ即ち憐るべきも其の国家を改造し国健を挽回のすることを帝の犠牲に差し上げたるを得す、幾百万の生霊を殺し幾億の財を費する国体

を永久に改善し得るとせば日傳の為に祈りあるべし
と余流流の序に曩の怪傳ラスプーチンの殺さんか
なることをつゝしむ本唱外相まさに一語を
語る

北怪傳も就猶汎の一人なり事実は
又側の世世を助けなる者なり陰に皇族中の心
ある者之れを厭ふことを甚し皇后をもと猶及
の出ずるを世流の癖とも迷信を恐るる意
うる北怪傳に依頼すうて皇太子
の為に羅ふ地位を低下せさうし時皇后
真意を持つ北怪傳に関する皇帝
の運命を以てせんとす偶に北傳我るるの

地方に於ける勅命を以て官位を運命を関
怪傳ふも皇帝の為地位を奪ふ
ふを以て北西電信の利益を奪ふ地位
を侵ひたんと果して電信の為地位
皇位の位を奪ふ為し為めに北の怪傳
を恐れの貴族を之れを
へて集の集所に北の怪傳を
馳を奪ふ為に北の怪傳を
ば案内なる貴族を陽に起主し歳めうも
銃を擬して四方北方を刑する法廷を
と云へ下に一律怪傳と金ヤ
作る、北方安ずこと貴族を皇后の逆

鎌倉に謫せられ、

北の怪僧のまち〳〵、〳〵、悉しく委しく伝いらるゝ本尊の云
ふ所、そんが誤りもそのそんが如き芽の吉、う現花露
五、行いんとすると云ふ、そんが客迫の内保寺の宣
氣の元塞する一端なを見るを得べし、元と我
元の平安朝代の世末を見るものゝ如き思ひあり
今、その華厳の起る由伝ふるあることを
知るべしと語る

○高僧の書帖の書を得しこと前年大阪と
指を脇うしなる書帖掛の絵をそんと称し、盛りよ
りそん高せるもの〳〵、悉しく二十八宿の絵
こ、後の出版したるものにて書帖の略年表の翻

子の名とはいふも的なりしなるまゝ書帖うの西生
の力を尊しなる様を北の冊子のもうもそのもの
完成せるの集を漢字の仮名の基礎家の作の
の第三集を見るを欲しと語しなることゝ
うを織功を兼する本源と作家の書の様
を組合の別人なると思ふ仮し今の浮世
絵を荒千の作者もかゝる仮し今の浮世
一説うニ説のあるうし或を今の浮世絵中こゝある説を
壮の仮の絵うも思ふる。高うしる絵の文仮
こ載せる説を万絵を刻すること悪の河国を説
しなるの什すも今の浮世絵を刻すること
元ん少絵うの壮時代の説のもとを北斎

きの俳号[illegible]なるもの[illegible]の[illegible]の[illegible]の

ゆしも高田牛蒡を出だし一杯を宴を
行うことを話し永井も持ちたしまず或も
一応出行き大体の方略を定むるの如勢を為す
ことを終に解す一つ
○時久須美雪巷の花を送の雪巷亜流
歌持示す二三の帳を次つて、中に雪村
反梅の梅の句を記し一行書あり巻し反
梅の筆跡なるべし晴るるの、北帳を
腰寝し得し利すと雖も一元就真を
為く外に古田松陰の古簡帳真跡
ひおもしろく就て雪巷余の為に自
書二三句を残す、又山陰城の福浦の墨

を示さる巻に長く牧の
渡張り渡り渡北の買に吾の花に
牧初の長に句を記すことあり
浮の書を得て見ること又
信夏数文晁筆下墨秀媚幽山意
巻を巻し晁浮の書をよく評する
と謂へべし

日上録

○大隈先生も余と松さんなる永井座摂州
の熊重大なり慈巻を歴史面に全国
を以て目せらる京敬の侯浦を大臣を以
する余の行くを無論背後に大隈先生
を高味する者也元今の藩事あれば行も

一快哉を試むるも男子の面目なり但し敗るゝが
童男なる故人目多の面目を潰すのみならず志侯
の不面目なり先侯の死遂に起訴の態を
持たしめひとりかん賀に於て起訴を被る
ハ既に一考を要する浜田藩
面目を被ることなるもなくして北条に移る一族
も如何なる手出しをせざる不利なるも余の
行くハ勿論のあることなるべし北条侯の息信常
氏義と夫人に於ても余と誠を同じうせん侯も例
の流儀なれば是迄に余に仕けるも強くるんず
ゝ新信常坂東(三郎)氏と姻の末坂東
代参を拒するゝを内決し侯の意況を得て

余を彫く先ずを得ざるを
○平山史札元の方西京を美術保存に到り元
る伏伯も利七の拓十の七八中に就て白石細格
の稿本十紙を一幅ずゝ新に書珍を見ふ而して殿
札終に余の手に帰す、光幡高氏親撰記ゝ
劈頭序あり二紙に渉る跡を露峰山秋滅中大
阿蘇山秋而して富士山秋の記、殿を為す者し
高玄徳の嘱に応じ記文を草しとる者也幅尾
太田南畝の識語あり

白石先生印時日課千字業力を使ふ番親
比記而到也

文政二年(己卯)仲夏 南畝太田覃識
○○

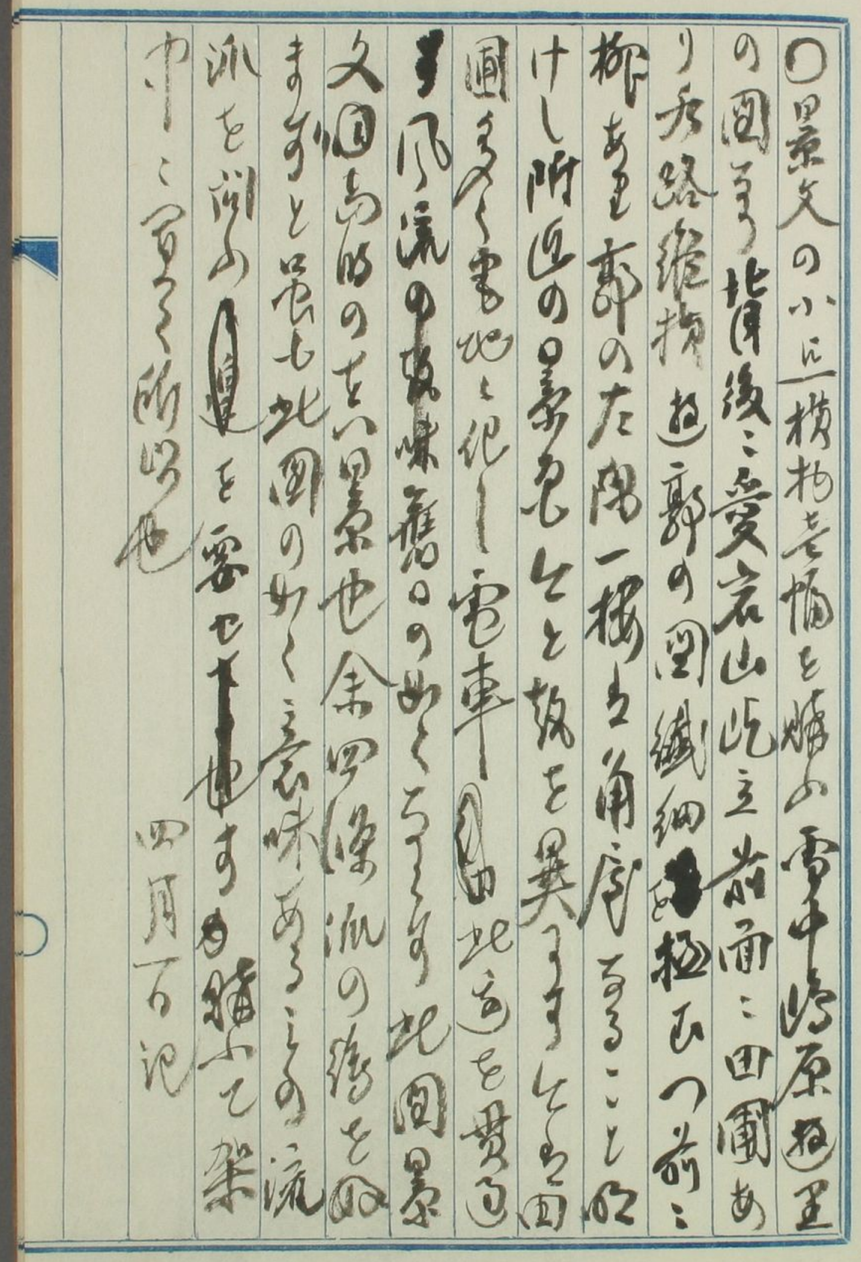
高氏の為の白石記を作ること侯と云へども而も北畠
三枚ありて不のこの高氏所蔵の右ともと冊子と
綴りたるこの書を写すること歴然たり若し一幅とす
なるを白石の書を高氏すなわち出とすると云ふものを供す
と雖も細川の大幅掲げるものを親しく使ふ
ず改装終て一巻となすべき歟 慶長十四年
(天正六年三月廿六日の記)
○為替状の事
田禄の米二百俵を拝領そうしに同じく
也後の為に為替状を出す
り表書裏書に右米海別のうちより
北条の天地の写と存すること多し 美濃

最為重しい也米高拾のうちに
頃の同時分後まふ責世を出 物てうるの
年田畑を譲うるる一間を寄せ集る所
こうるあり米を為替為と代
と云ふ

謹啓左京權大夫藤原信實は實に鎌倉時代に於ける大倭繪師中の巨擘にして、殊に似繪即ち人物寫生の妙技に至りては、古今を曠うして其匹儔を見ざる所の人たるは、事新しく申すまでも無之事に御座候。然るに其現存せる遺作中の大篇長卷にして、鑑賞界に重寶せられ候ものとては、北野神社所藏の北野天神緣起と佐竹伯爵家藏弄の三十六歌仙像卷とに過ぎず候は、洵に物足らぬ心地のせられて、鑑賞家の遺憾とする所に有之候。殊に彼が一代の傑作にして大卷たる水無瀨殿四季繪卷四本の如きは、詞書も同筆にして稀有の名什なりしに今は唯高野日記に其名題の記されたるあるのみにて、何時しか亡失して世にその跡を留め申さゞるは分けても遺憾の至りに御座候。抑も信實は曠古の書家たりしと同時に又當時有數の歌人たりしことは、彼が七玉集の撰者たり、又續後撰集敕撰の時その詠歌入選の御沙汰さへ蒙りしことあるによりて明かなる次第に候。されば信實の詞藻と筆蹟との如何に優秀なるかを見るには、此の四季四卷の繪卷の如きは實に崛强のものなるべきに、空しく湮滅に歸せしは返す〳〵も殘念なる事に御座候

然るに茲に又古記に信實が遺作中に繪師草紙と稱する者これあり、水無瀨殿四季繪卷と同じく詞書も一筆に成れるものに候が、何時の頃よりか古筆家に藏せられし處弘化五年幕府に献上せりとこれあり候。又黑川春村の考古畫譜中繪師草紙項に、纂輯者古川躬行が此卷古筆了伴所藏す幕府に献ぜりほどなく大城回祿に罹り卷子烏有となれり可歎惜丹鶴叢書中有摹勒不足見と註し、又同項に古筆了悅もこの卷いかゞなりけん世に傳らずと補記しあり。また柏木探古の物せる大倭畫名卷競には繪師草紙信實筆原德川家藏今不傳と記し候ひて、この名什は水無瀨殿繪卷と共にその亡失は既に決定の事實として、何人も美術界の痛恨事と致せし所に御座候ひき。然るに焉んぞ知らんこの烏有湮滅に歸せしと信ぜられし繪師草紙は實に事ゆゑなく德川家に藏弆保存せられ、明治の大御代に至りて同家より畏くも　帝

室に献上相成り申候はんとは。さりながら九重雲深くしてたやすく人の窺伺を許るさず、世は全く灰燼に歸せしものと絶念致しをり候處、茲に圖らずも本年一月東京帝室博物館内表慶館に展觀を許るさせたまひ候御物繪卷物は實にこの灰燼となりしとのみ信ぜられし繪師草紙其物にして、始めて之に矚目せし鑑賞家等は唯驚異の眼を瞠り、亡友の忽然蘇生せしが如き想を爲し、相傳へて忽ち鑑賞界の評判と相成り、俄かに館内拜觀者の數を劇増せしむるに至り申候抑も繪師草紙とは實に其名題に示めされ候通り、繪師たる作者信實が一身上に逢遇せし事實に對し、感慨のあまりに滿身の心血を瀝ぎて一氣に呵成せし自畫傳にして、天籟の興趣を振ふに洗煉の絶技を以てし、且つ之を賛け補ふに自筆の詞書を添へ申候。書畫共に筆勢縱横、意趣横逸し、觀る者をして覺えず作者の寓意に同情し、また其の絶藝に心醉せしめずんば止まざるものこれあり候。吾人は實にこの草紙に於て始めて信實が書畫の雙絶なると詞藻の超凡なるとを知り、心ます〳〵敬服せざるを得ざるに至り申候。



以下全て

白　紙